

ベバシズマブを含む化学療法と温熱療法との長期併用治療経過中に 肝萎縮を来した一例

原三信病院 放射線治療・ハイパーサーミアセンター

元村 哲也、古藤 和浩、真鍋 麻実、嶽本 洋、寺嶋 廣美

症例は 80 歳女性。4 年前に直腸癌で直腸摘出術を受けた。術後 2 年間ベバシズマブ併用 m-FOLFOX、その後 2 年間は、ベバシズマブ併用 FOLFIRI による化学療法を継続されたが、肺転移、肝転移が出現した。1 年半前から、肝転移巣を主な標的として、温熱療法の併用を開始（腹臥位・心窩部中心）。術後から一貫して、血液検査での肝機能異常はほとんど認められていなかったが、温熱療法導入時の腹部 CT では、手術直後と比べて、肝両葉の軽度萎縮が認められた。温熱療法開始後も肝機能異常は認めなかったが、肝萎縮は更に急速に進行し血小板数も著減した。肝萎縮はベバシズマブを含む化学療法によるものと推察されたが、ALT の上昇はなく、極めて稀なメカニズムによって肝細胞破壊が継続していたのではないかと推察された。ベバシズマブによる副作用報告で、肝萎縮に言及しているものは極僅かであり、頻度は不詳である。本症例では、温熱療法の導入前から肝萎縮は始まっており、その後の肝萎縮の進行にどれだけ温熱療法が寄与したかは不明であるが、肝萎縮患者への温熱療法は、肝虚血による肝不全の危険因子となり得る。温熱療法は一般的に化学療法と併用されるが、治療のリスク要因となるような副作用の発生に常に気を配っておく必要があると考えられた。